住井すゑとその文学の里（三十八）

ー牛久沼のほとりー

牛久市文化財保護審議委員
栗原（くりはら） 功（いさお）

国家総動員法と住井の文筆活動

昭和12年（1937年）7月、中国北京西郊外の盧溝橋（ろこうきょう）で事件が起こった。この事件に対して第一次近衛内閣は、即刻、不拡大方針を採って、現地解決に努めたが、日中の全面戦争に拡大していった。近衛内閣は、日中戦争を遂行するため、翌13年（1938年）5月より、国家総動員法を施行した。同法には作家の活動を細かく規制する条文があった。早速、内務省警保局図書課から出版各社に、要注意作家の氏名を記載したリストの内示があった。これより大多数の作家は、住井の場合も、敗戦の日（昭和20年（1945年）8月15日）まで、戦意高揚を図る文筆活動を余儀なくされた。

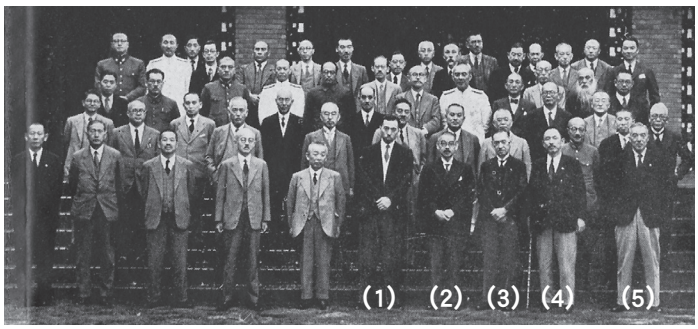
第一次近衛内閣には風見章が書記官長（現在の官房長官）として入閣していた。風見は、明治19年（1886年）に結城郡水海道村高野（現常総市）で生まれた。早稲田大学政治専攻科に進み、雄弁会（ゆうべんかい）（※1）に所属して、生涯の友になる同期の中野正剛（のちに衆議院議員※2）と後輩の緒方竹虎（のちに朝日新聞社副社長。鳩山首相の後継者と目された）に出会う。風見は中野と一緒に朝日新聞社に入社するが、信濃毎日新聞社に移る。昭和5年（1930年）の総選挙に郷里茨城三区から出馬、当選（以後3回、戦後5回連続当選）して民政党に入党。その一方で風見は、翌6年（1931年）11月に農本主義論者による「日本村治派（そんじは）同盟」結社に、武者小路実篤、今東光、橘孝三郎、犬田卯（住井すゑの夫）らと参加。風見は、会場の神田一ツ橋教育会館で出会った同郷の犬田と親交を持つようになり、この2人に同郷の野口雨情が加わっての親交が長く続いた。

近衛文麿は、昭和15年（1940年）7月に第二次の内閣を組閣するが、これに風見は司法相としての入閣となった。近衛首相は初閣議で基本国策要綱『大東亜ノ新秩序建設』を示した。これは〝大東亜共栄圏ノ建設（東アジアを欧米諸国の植民地支配からの解放）〟ともいわれ、これに対する米国（中国蒋介石率いる国民党軍に、大量の武器と諸物資提供や航空隊（飛行機と搭乗員）および軍事顧問団派遣）の実力干渉は断固排除するという方針であった。近衛首相は中国国民党軍との停戦に努めていたが、陸海両軍首脳部は「内閣は陸海両軍の統帥権（とうすいけん）（最高指揮権）をもたない、陸海両軍が統帥権を有する大元帥（だいげんすい）（天皇）直属だ」、と政府の方針を無視し、特に陸軍は中国戦線を拡大した。近衛首相は陸軍の突出と、年齢が40歳代の陸軍佐官級（※3）による下克上を抑えるための新体制（国民的な政治組織）構想を描いていた。その新体制運動を進めたのが第一次近衛内閣の農相だった有馬頼寧と風見章であった。最初に自主解散したのが唯一の無産小政党（労働者・小作農民を選挙基盤にした）社会大衆党であった。これに二大政党政友会・民政党が続き、さらに四小党も自主解散して、同年10月結成の「大政翼賛会」への収れんとなった。しかし、大政翼賛会は近衛の意図とは異なった組織になった。その上、近衛が翌年日米開戦反対を唱えて辞職し、後継首相に就任した東条陸軍大将が日米戦争に突入してからはナチス流の一国一党軍部独裁政治機関となった。

（※1）雄弁会出身者では竹下登、海部俊樹、小渕恵三、森喜郎が首相になっている。石橋湛山首相は雄弁会に属しないが早稲田大学出身だ。

（※2）中野正剛は昭和17年11月に母校早稲田大学の大隈講堂で創立60周年を記念しての講演を行った。「日本の巨船は怒とうの中に漂っている。便乗主義者を満載していては危険である。諸君、自己に目覚めよ。天下一人をもって興れ」と、後輩たちを激励すると同時に、東条内閣批判の意味を込めたものだった。翌18年10月21日、中野は倒閣企図の容疑で憲兵隊に検挙され、釈放直後の同月27日に代々木の自宅で割腹した。

（※3）昭和13年3月3日午後、衆議院の国家総動員法を審議する委員会で政府委員陸軍省軍務課国内班長佐藤賢了中佐（43歳）が独断演説中、かつての佐藤の上官宮脇委員が「やめさせろ」とやじを飛ばした。それに対して佐藤は「黙れ」と一喝。この黙れ事件は、陸軍が国会を威圧したという象徴的な解釈をされ、さらに陸軍の下克上といわれるようになった。



⬆昭和15年9月開催の新体制準備委員会（大政翼賛会）。首相官邸玄関にて（1）近衛文麿（2）松岡洋右（3）有馬頼寧（4）中野正剛（5）風見章、（1）近衛文麿の後ろが緒方竹虎で東条陸相、橋本欣五郎陸軍大佐、及川古志郎海相、正力松太郎ら政界・軍部官僚・財界・言論界・文化人の各層各階級の有力者51人で構成された。
―風見章著『近衛内閣』より（犬田家蔵書）―